2014.07.16（水）11時
現地説明会資料

伏津館跡（ふしつだてあと）の発掘調査

―戦国時代の城館跡―

（公財）岩手県文化振興事業団
埋蔵文化財センター

1．はじめに

今回の発掘調査は、三陸沿岸道路普代久慈工区の施工に関連して、事前に行われる緊急発掘調査です。昨年度に引き続き、7,700㎡を対象に平成26年４月10日～８月15日の予定で調査を進めています。

伏津館跡（ふしつだて・ふづつだて）は、野田村役場から西約800mに位置しており、北を秋田川、南を明内川に挟まれた独立した丘陵上に立地しています。

遺跡は、平安時代には安倍氏の家臣である伏津新九郎忠信の居館であったと伝えられていますが、この時期の文献は残ってなく、詳細は不明です。

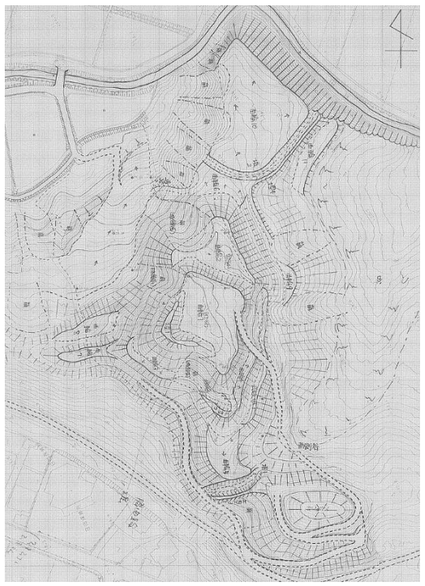
全景（北西上空から）

野田村内で、岩手県が把握している中世城館は、本遺跡の他に古館（野田字三日市場）、新館（野田字城内）、玉川館（玉川）があり、古館と新館が野田城の候補地として挙げられています（岩手県2009）。新館遺跡は、平成24年に防災集団移転に関連する調査が行われ、縄文・古代の遺構・遺物の他に、戦国時代末期に位置付けられるテラス状遺構や、それに伴って甲冑の一部（佩楯・はいだて）に用いる札板と見られる漆膜が出土しています。漆膜の年代測定の結果、16世紀頃に製作されたと推定されており、これにより野田城（古館）破却後に設けられたとされる野田氏の館が存在していた可能性が指摘されています（野田村2013）。

2．見つかった遺構

今回の調査で確認した遺構は、縄文時代の陥し穴状遺構（おとしあなじょういこう）10基、古代の炭窯（すみがま）２基、中世の曲輪（くるわ）８箇所・堀跡１条・土塁（どるい）２箇所・切岸１箇所・武者走り状遺構２箇所・掘立柱建物（ほったてばしらたてもの）５棟・柱穴状ピット110基（建物分含む）・土坑21基・溝跡９条です（平成26年７月４日現在）。

中世の遺構の大半は、調査区内で最高所の曲輪１と次に高い曲輪２に集中しています。曲輪１は一辺30mの方形に整地されており、平坦部が造られています。平坦部の西から南にかけては平坦面からの高さ２m以上の土塁がＬ字に巡らされており、この方向からの防御性を高くしています。また、曲輪１と曲輪２の間にある斜面は高さ５mの急傾斜を呈し、人工的な切岸が造られています。曲輪２は45×25mの台形に整地されており、曲輪１よりも狭い空間ですが、北側に開けた見晴らしの良い場所です。南側には、中腹に巡る腰曲輪と考えられる曲輪３や通路と考えられる武者走り状遺構が配置され、最南端には尾根を分断する堀切が設けられています。堀は断面形状が緩いＶ字形を呈し、規模は長さ32m・幅８m・深さ２～５mと長大な造りをしています。



伏津館縄張り図

一段下の平坦部である曲輪２から、地中に直接柱を据えて建てる「掘立柱建物」と呼ばれる建物跡が２棟見つかりました。地面に掘られた穴は、当時柱を据えるために掘られた柱穴です。

SB02とした１棟は、かつて京の都や平泉などで多く見られたような非常に立派な構造の建物です。身舎（もや）と呼ばれる建物の中心となる内側の部分は南北２間（柱と柱の間の数）、東西５間の規模ですが、その周囲にはさらに１間分ずつ庇（ひさし）と呼ばれる張り出しが設けられているため、実際の外観はひと回り大きな南北４間、東西７間の建物となります。また、身舎の西から２間目にあたる建物の中央には間仕切りの柱が設けられており、建物内が壁によって仕切られ、２つの部屋に分かれていたこともわかります。この間仕切りの柱穴からは琵琶（びわ）を表現した硯（すずり）が出土しています。

SB03としたもう１棟は、南北１間、東西３間の小さな建物で、柱も細く、柱の並びもまっすぐにそろっていません。柱の上に屋根をかけただけの簡易な建物であったと思われます。建物内部の地面からは、赤く焼けた箇所が２箇所見つかっていることから、何かを作っていた工房（こうぼう）の跡であったと考えています。

3．出土した遺物

今回の調査では、縄文前期（約5,000年前）・晩期（約2,500年前）の土器が少量と、中世の陶磁器が大コンテナ（40ｌ）1.5箱、石臼５個体分、金属製品５点、銭貨18点が出土しました。

SB01建物の遺物出土状況

中世の遺物は、大半が曲輪１及び曲輪２から出土しており、なかでも曲輪１西側のSB01建物からはその場で壊されたような陶磁器が集中して確認されました。

陶磁器には瀬戸美濃焼など国産のものだけでなく、中国から輸入した青磁の碗や香炉（こうろ）、白磁の小皿、天目茶碗など当時としては高価な品が多く含まれています。

また、遺物の組み合わせを見ると、茶を点てる道具である碗や茶壺、茶臼、風炉（ふろ・釜を火にかけて湯を沸かす）、香を楽しむ香炉、花を生ける青銅製の花入（はないれ）、書の道具である硯や水鳥形の水滴（すいてき・墨を磨る際に水を注ぐ）が出土しています。これらの遺物から、伏津館は教養が高く、高価な品を集めることのできる財力を持った有力者の居館であったと考えることができます。また、曲輪１南端の土坑からは廃棄された貝殻が出土しており、当時の食性を考える上で貴重な資料となります。

出土した中世の遺物は、戦国時代（15世紀後半）に比定されるものが中心です。これ以降の遺物は確認されていないことから、この時期を境に何らかの理由によって伏津館は廃絶したものと考えられます。

4．おわりに

今回の調査から、伏津館跡は縄文時代と中世の複合遺跡であることが分かりました。特に、中世の遺構・遺物を主体としており、有力者の居館であった可能性があります。遺構の重複がほとんどないこと、出土遺物が狭い時期に限られることから、城館として機能した期間は短命であったと推測されます。文献など歴史上には登場しない伏津館ですが、その館主は戦国時代の15世紀にはこの地域を支配していた有力者であったことは疑いありません。

今後は城館や建物の構造、出土遺物など様々な視点から検討を行い、当時の野田村に存在した伏津館の歴史的な位置付けを考えていきたいと思います。

最後に、今回の調査にご協力とご理解を頂きました地域の皆様、野田村教育委員会、国土交通省東北地方整備局三陸国道事務所をはじめ、関係者各位に深く感謝申し上げます。

（（公財）岩手県文化振興事業団埋蔵文化財センター）

［参考文献］　・岩手県　2009　『岩手県遺跡台帳』　・野田村　2013　『新館遺跡発掘調査報告書』野田村埋蔵文化財発掘調査報告書第３集

切岸（きりぎし）
尾根を削って急な斜面を築いています。
簡単にはのぼれません。

掘立柱建物（ほったてばしらたてもの）【SB02】
一段下の曲輪（くるわ）２からは大きな建物跡が見つかりました。

柱の穴はこんなに深い!!

土塁（どるい）
曲輪（くるわ）１の南西隅には、敵の侵入を防ぐための高まりが築かれています。建物の風よけの役目も果たしていたのかもしれません。

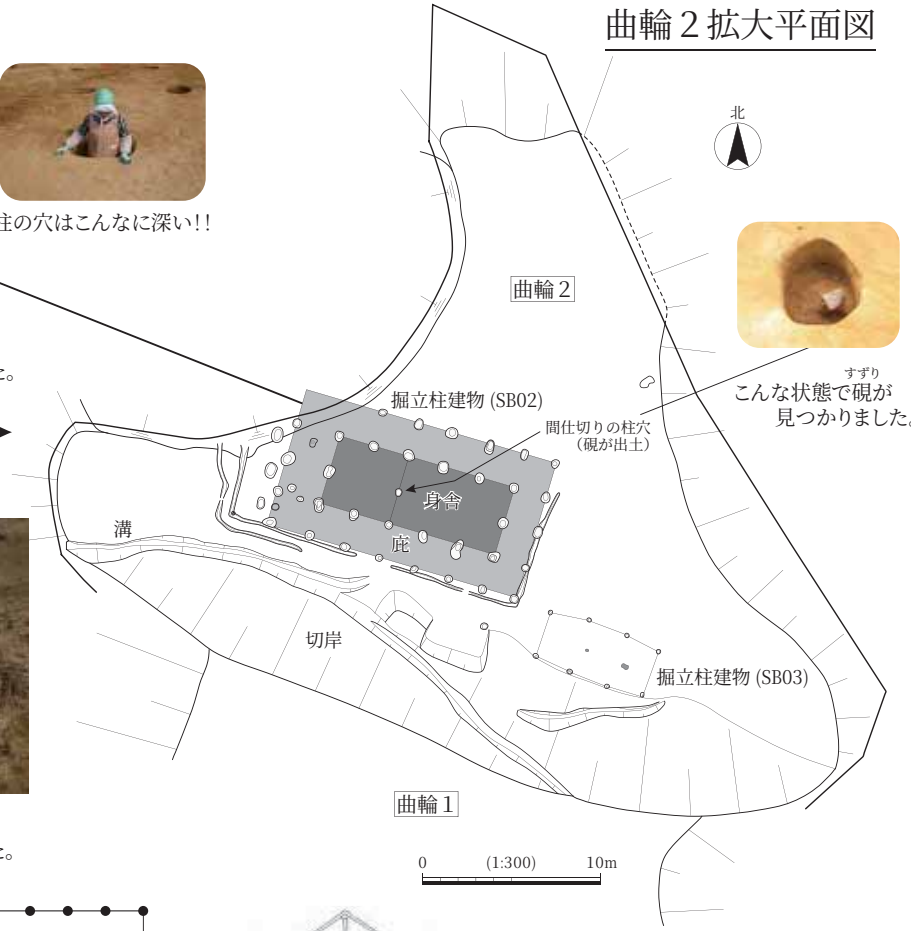
掘立柱建物【SB01】
土塁の裾で小さな建物跡が見つかりました。

堀切（ほりきり）
敵の侵入を防ぐために、尾根筋を分断する大きな溝が掘られています。

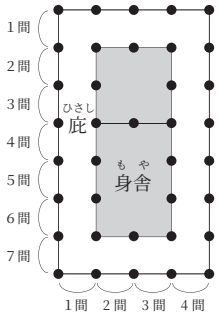
伏津館跡調査全体図

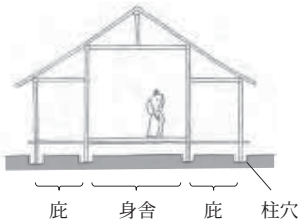
拡大

曲輪２拡大平面図

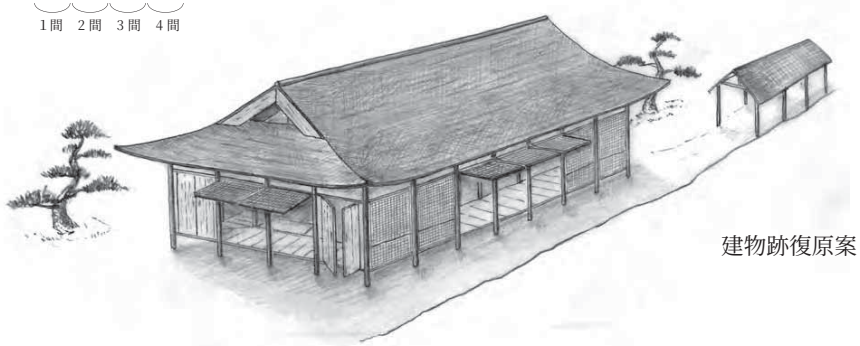


こんな状態で硯（すずり）が見つかりました。





建物構造模式図



建物跡復原案